

中国のほんの話(91)

書物の敵 ～鄭振鐸『蟄居散記』～

蔭山達弥

今から約四十年前、筆者が大学三年生の時、本学で講師をされていた著名な書誌学の先達、故庄司浅水先生の授業を受講する幸運に恵まれた。先生には、火や水や昆虫、そして人間など書物の敵に対しての抗議ともいえるウイリアム・ブレイズ(William Blades)の名著『書物の敵』(The Enemies of Books)を底本として、それを適宜補正し、分かりやすい解説を付した著書『書物の敵』(講談社学術文庫、1990.5.)がある。

火の暴威(火事や焚書)、水の脅威(洪水や雨漏り)、「本に付く虫」として古くから有名な紙魚(シミ)やシバンムシ、蒐集家の身勝手、子供の狼藉など…愛する書物を破壊する敵は限りないが、焚書、それも自ら書物を焼かなければならないことほど悲痛なことはないだろう。「この本は問題になるだろうか」「この雑誌は、残しておいてもさしつかえないだろうか」…。日本占領下の上海で、文化統制は極度に強まり、あらゆる抗日的な書籍・雑誌・新聞が所持者の手によって焼き捨てられる運命に遭った。そのような悲痛な体験をした一人、鄭振鐸(1897～1958)は、終戦直後(1945.9.8.～1946.2.16.)、「抗日戦争勝利」の興奮のなかで、上海で発行された週刊評論雑誌『周報』に、占領下の苦しかった日々を回想して『蟄居散記』(書物を焼くの記事、岩波新書青版172)という随筆を連載した。

「わが中国では、大がかりな焚書が、歴史のうちで何回かおこなわれたことがある。秦の始皇帝は、六国を統一すると、まず焚書をやった。(中略)これは、もっとも徹底した焚書であり、もっとも徹底した愚民の計だ。…こののち、どの時代にも焚書があった。あるいは、歴史的文献を焼いて自己の無法な帝位奪取のあとをかくそうとしたり、あるいは、仏教や道教の書物を焼いて宗教的統制をはかったり、あるいは、淫猥な書物を焼いて道徳の純潔を維持しようとした。さいきん三百年においては、清朝の皇帝たちが、大いに焚書をやった。わたしたちは、何冊もの、いわゆる‘全毀’‘抽毀’

と称される書目をみるごとに、おもわず背筋がさむくなる。そして、異民族の鉄蹄下における文化生活が、いかにたえがたく、くるしいものであったかを、いまにいたるまでもかんじさせられるのである。」(《烧书记》安藤彦太郎・齋藤秋男訳、『蟄居散記』所収)

自ら書物を焼くくんだり、鄭振鐸は、青年のころ、同級生であった瞿秋白からおられた一冊を火に投じている。瞿秋白は早くから人民革命の戦列に身を投じ、そのために国民党の手で惨殺された。「瞿秋白がくれた署名入りのロシアの本まで、暖炉にほうりこまなければならなかった。自分がまったく残忍な人間のように感じられた。いくたびか、眼のふちをあかくしては、涙ぐむのだ。これは煙のなせるわざであろうか。」(同上)

鄭振鐸は『蟄居散記』の序文の中で次のように述べている。「こうした暗黒の一時代、悠久‘八年’にわたった暗黒の時代について、後世のかがみとしての詳細な記録を綴るとすれば、それは、いたずらに勝利の歓呼をうたうよりも、はるかに意味があろう。わたしは、日本軍が上海に侵入した‘八・一三’事変(1937)後、何回となく住居を移し、とめどなくさまよいあるいたが、太平洋戦争のはじまった‘一二・八’(1941)以後は、じっと二階にとじこもったまま、いっさい人との交際を断ってしまった。おどかされたことも一再ならずあったけれども、さいわい捕らわれの身ともならず、刑も受けずにすんだ。自分自身をとじこめていたわたしを、勝利の歓呼が冬ごもりから蘇らせたのである。」(同上)

八年間! コロナ禍が始まって僅か一年余りで、思わず弱音を吐いてしまう私たちとは比較にならない長さ。占領下で良心的に生きた知識人が、その悲痛な体験と民衆の生活を生々しく描いた『蟄居散記』は、困難な現代を生きる私たちに多くの示唆を与えてくれる。

かげやま たつや(非常勤講師・中国文学)